

2022年度プログラムの実施概要

開催期間：2022年2月18日（土）～3月18日（土）

実施機関：QUT（クィーンズランド工科大学）College

参加学生数：15名(教養学部前期課程：1年3名、2年1名、工学部：3年8名、4年3名)



参加者からの声（一部抜粋）

- ◆ 本プログラムを通して英語力やコミュニケーション力の向上を実現できたと感じるが、それに加え、自分の知らない様々な世界を覗く機会が多々あり、考え方さえも影響を受けた。今自分が身を置いている環境に安堵し落ち着いてしまうのではなく、積極的に異なる環境に立ち入り、異なる環境で生きる人々と出会い、刺激を受け、自身の可能性や選択肢を無限に広げていきたいと決意するきっかけとなった。（学部1年生）
- ◆ 今回のプログラムで、工学の場における英語を実践的に学べたり、様々なバックグラウンドを持つ人と交流することができた。海外に行くことや海外の人との交流に対する心理的ハードルが下がり、このプログラムの目的を果たすことができたのではないかと思う。今後も大学やその他のプログラムを活用し、日本だけにとどまらず、工学の学修や研究をしていきたい。（学部1年生）
- ◆ 今回のプログラムは1ヶ月という期間でしたが、自分はこれを短いと感じました。行く前は長いと感じていましたが、いざ現地については時間があっという間に過ぎていき、正直もっと長く滞在したかったとも思いました。実際、QUTの方々は英語学習のための1ヶ月の留学は短いと評価する方がほとんどでした。そのため、自分は将来もう一度海外留学したいと考えるようになりました。プログラム参加前は海外留学を自分には出来るか分からない怖いものだと感じていましたが、実際に行ってみると留学は思いのほか楽しかったので、近いうちにもう一度海外に行きたいと思います。今後研究の発表などで海外渡航、もしくは海外留学することがあるかもしれませんが、その時は海外を恐れることなく、むしろ楽しんで臨むことができるだろうと思います。（学部3年生）
- ◆ 本留学を通して様々な学びを得ることができた。英語力については、毎日英語の必要性に迫られて英語を使用していく中で、英語に対する苦手意識や抵抗感は減ったと思う。この経験が無駄にしないためにも日本に帰ってから毎日少しでも英語に触れ、言語交換プログラムを使用するなど英語に触れる機会を増やしていきたい。また、生活様式や物の考え方については日本との相違点を認識するとともに、自国の文化についてもより詳しくなりたいと感じた。そして、改めて自分で行動することの重要性を感じた（学部4年生）

※2020・2021年度についてはCOVID-19の影響によりプログラムの実施はありませんでした。

2019年度プログラムの実施概要

開催期間：2020年2月15日（土）～3月13日（金）※翌早朝日本着

実施機関：ANU（オーストラリア国立大学）

College of Engineering & Computer Science

参加学生数：19名(教養学部前期課程：1年 1名、2年 13名、工学部：3年 5名)

参加者からの声（一部抜粋）

- ◆ このプログラムで英語のスピーキング力やリスニング力はもちろん渡航前よりは高まったと思うが、その変化よりも「自分の英語を積極的に使いながら海外で過ごす」ことができる自信という観点の変化の方が大きい。渡航前は1ヶ月も海外に滞在するというのは不安だったが、今や物怖じすることなく1ヶ月や半年、1年といった海外滞在に挑戦することのできる自信が持てるようになった。（学部2年生）
- ◆ この経験を通して英語に対する抵抗や恥じらいが小さくなったと思う。とはいえ、ネイティブ同士の会は聞き取れないことが多かった。また、とっさに向けられた質問に対して瞬時に言いたいことが出てこなかったために詰まってしまうことが多かった。そのため、これからさらに英語を勉強してスムーズに会話が交わせるようになりたいと強く思うようになった。（学部3年生）

